様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０３３３２

研究課題名（和文）社会科学者としてのＥ・バーク：経済思想と歴史叙述の分析を基軸とした総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Edmund Burke's Social Science from the Perspectives of Historiography and the History of Ecomonic Thought

研究代表者
中澤　信彦（Nakazawa, Nobuhiko）

関西大学・経済学部・教授

研究者番号：４０３０９２０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,100,000円

研究成果の概要（和文）：社会科学者としてのバークの全体像をできるだけ包括的に描き出すために、専門分野や対象へのアプローチをそれぞれ異にする10名のバーク研究者が緊密な共同研究を進め、大まかに言って以下の2種類の研究成果を得た。第1に、本プロジェクトのメンバー10名全員で『バーク読本――〈保守主義の父〉再考のために――』（昭和堂、2017年8月）を執筆・出版し、わが国における「社会科学者としてのバーク」研究の端緒を開いた。第2に、本プロジェクトの研究成果の国際発信を担当する中澤と桑島と佐藤が、英語での研究成果を書籍の公刊、国際査読雑誌での論文公刊、国際学会での口頭発表などの形で残した。

研究成果の概要（英文）：This research project has produced the following deliverables, which will contribute towards facilitating the comprehensive understanding of Edmund Burke as a social scientist:(i) All the members of this project published the co-authored book titled A Companion to Edmund Burke: Reexamining the Founding Father of Conservatism (Showado, 2017; in Japanese).(ii) Nakazawa, Kuwajima and Sato, who were in charge of promoting the international distribution of the research results, delivered a number of refereed publications and presentations on the subject in question in English.

研究分野：経済学説・経済思想

キーワード：バーク　保守主義　経済思想　歴史叙述　スコットランド啓蒙　文明社会　国制　帝国

１．研究開始当初の背景

エドマンド・バーク(1729/30-97)は 18 世紀イギリスを代表する政治家・著述家の一人として、とりわけその徹底したフランス革命批判によって「保守主義の父」として、広く知られる。しかし、彼と交流のあった同時代人アダム・スミスやデイヴィッド・ヒュームらと比べると、社会科学者としてのバークの全体像はいまだ判然としないのが実状である。その理由として、バークの著作の大半が目まぐるしく変転する多様な問題状況(時事問題)への応答として準備された時論的な議会演説原稿・公開書簡・パンフレットであること、それらが哲学的・体系的著作という形で残されていないことが、しばしば指摘される。だが、より本質的な理由は、バークの経済思想および歴史叙述をめぐる研究の立ち遅れに求められるべきではないか、というのが研究代表者(応募者)の基本的立場である。

研究代表者はこれまでスミスと並ぶ代表的な古典派経済学者であるマルサスとの比較を基軸として、バークの経済思想の特質と意義の解明に取り組んできた。そして、バークの経済思想の道徳的性格と反市場原理的性格を剔抉し、そうした特徴を有する彼の経済思想と彼の保守的な政治思想との知的関連を「保守主義の政治経済学」という概念によって定式化し、彼と同様にフランス革命を批判したマルサスが後に展開することになる議論を部分的に先取りするものであることを示した。しかし、経済思想と密接な関係を有するはずの歴史叙述の分析については、能力と時間の制約によって断念せざるをえず、同時に、社会科学者としてのバークの全体像を俯瞰する研究を単独で遂行することの困難も実感した。ここに本共同研究プロジェクトを組織する必然的な理由が存する。

２．研究の目的

本プロジェクトの目的は、バークの経済思想および歴史叙述の特質と意義を解明することを通じて、バークが構想した/し得た社会科学の全体像をできるだけ包括的に描き出し、それがヒュームやスミスに比肩しうるような豊かな内容――(今日で言うところの)哲学・歴史学・法学・政治学・経済学の総合的探究――を有している次第を説得的に示すことである。

政治活動において示されたバークの「保守」の政治哲学・思想について、わが国は岸本広司『バーク政治思想の展開』(2000)といったすぐれた先行研究を有しているが、岸本の大著の考察対象は政治に限定されており、バークの社会科学の全体像に関するスタンダードな見解はいまだ提出されていないのが実状である。

そこで本プロジェクトでは、専門分野や対象へのアプローチをそれぞれ異にする 10 名のバーク研究者による緊密な共同研究を通じて、個別研究者による単独の努力の限界を乗り越え、社会科学者バークに関するスタンダードな見解を提出したい。また、共同研究メンバーのインターディシプリナリーな構成を最大限に活かして、バーク社会科学の今日的意義をできるだけ広範なパースペクティブの中で考察したい。

３．研究の方法

本共同研究プロジェクトは、平成 27 年度から 29 年度までの 3 年間にわたり、研究代表者に 8 名の研究分担者と 1 名の研究協力者(高橋和則氏)を加えた合計 10 名の研究者から構成される。10 名は 4 つのサブテーマ「経済思想」「歴史叙述」「国際関係」「国制(憲法)」のいずれかに分属し、それぞれが他のサブテーマとの関連を強く意識しながら、社会科学者としてのバークの全体像の解明を目指す。

1年度目(平成27年度)は研究の遂行に必要な資料・史料の収集が最大の課題となる。手

許の資料・史料だけでは不十分な場合は、国内外で必要なものを調達する(海外調査を含む)。また、国内外の学会・研究会に参加して専門家と交流し最新の知見に触れることで、研究のスコープの明確化を図る。研究代表者は研究分担者・協力者と密接に連絡をとり、研究の進捗状況を把握する。

2 年度目(平成 28 年度)は、 各メンバーは分担テーマに関して個別に研究を進め、その成果を国内外の学会・研究会で報告し、討論を通じて研究の深化に努める。

3年度目(平成29年度)は本プロジェクトの完成年度である。各メンバーは国内外の学会・研究会で報告を行いつつ、得られた知見を整理して第一次草稿を当該年度の9月を目途として完成させる。年度末までに研究成果を書籍として出版する予定で、出版社(昭和堂)からの内諾もすでに得られている。

研究の途中経過の報告や草稿の検討を行うための研究会を、3 年間で 6 回(年 2 回)開催する予定である。メンバーのスケジュールの調整がつかず研究会の開催が難しい場合は、所属学会の大会での個人報告やセッション企画などで代替する。研究会の記録はホームページ等を通じて一般に公開する。

４．研究成果

3年間の共同研究プロジェクトの初年度にあたる平成27年度は、(1)研究会・学会での研究報告と活発な議論を通じて、すでに共有されている問題意識をいっそう深化させること、(2)研究の遂行に必要な資料・史料を収集すること、以上の2点に力点が置かれた。

プロジェクトの2年目にあたる平成28年度は、メンバー全員が、平成27年度の成果(すでに共有されている問題意識のいっそうの深化、研究の遂行に必要な資料・史料の収集)を十分に踏まえながら、共同研究の成果となる書物に収録予定の論文の草稿を仕上げることに力を注いだ。

プロジェクトの3年目(最終年度)にあたる平成29年度も、27年度・28年度と同様に、ほぼ当初の計画通りに順調に研究を進めることができた。

科研費の申請時に出版を約束していたプロジェクトの成果となる書物については、それを中澤信彦・桑島秀樹編『バーク読本――〈保守主義の父〉再考のために――』(昭和堂、2017年8月)としてまとめ、3年間のプロジェクト期限内に無事に出版することができた。メンバー10名全員が寄稿(分担執筆)したこの書物は、「バークの経済思想および歴史叙述の特質と意義を解明することを通じて、バークが構想した/し得た社会科学の全体像をできるだけ包括的に描き出し、それがヒュームやスミスに比肩しうるような豊かな内容――(今日で言うところの)哲学・歴史学・法学・政治学・経済学の総合的探究――を有している次第を説得的に示す」という本プロジェクトの中心課題――海外でもほとんど例がないきわめて野心的な課題――に真正面から挑んでいる。本書は社会科学者バークに関するスタンダードな見解を提供するものとして今後長く読み継がれることが強く期待されている。

中澤と桑島と佐藤が主として担当した研究成果の国際発信(英語)についても、出版物(書籍、国際査読雑誌掲載論文)と国際学会での口頭発表などの形で業績を残すことができた。

3年間で6回(年2回)開催予定だった開催予定だった本科研費にもとづく研究会(通称「バーク研究会」)は、校務等の関係でメンバーのスケジュール調整が難航し、残念ながら4回の開催にとどまったが、それを除けば、ほぼ当初の研究実施計画通りに共同研究を進めることができ、研究実績を着実に残すことができた。

バーク研究会ホームページ：
http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~nakazawa/index.htm

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 22 件)

[1] NAKAZAWA, Nobuhiko、Reviewing Edmund Burke ’s Concept of ‘ Revolution ’: An Overlooked Aspect of the Burke-Paine Controversy、Studies in Burke and His Time、査読有、27、2018、ページ未定

[2] 立川潔、エドマンド・バークの社会認識とコモン・ローにおける身分概念、成城大学経済研究、査読無、218、2017、375-411

[3]桑島秀樹、メタモルフォーゼの美学、あるいはインターフェイスの存在論―〈ケルト的〉世界認識と映画の文法、CARA、査読無、25、2018、7-12

[4]真嶋正巳、バーク：第二回大陸会議と「再度の和解演説」、社会情報学研究、査読無、22、2017、1-22

[5]INUZUKA, Hajime、Seiji-tetsugaku-teki kosatsu: riberaru to sosharu no aida (Papers on Political Philosophy: Between Liberal and Social)、Social Science Japan Journal、査読無、20：2、2017、287-290

[6]犬塚元、政治思想の「空間論的転回」：土地・空間・場所をめぐる震災後の政治学的課題を理解するために、立命館言語文化研究、査読無、29：1、2017、67-84

[7]犬塚元、歴史の理論家としてのポーコック：その知的軌跡における政治・多元性・批判的知性の擁護、思想、査読無、1117、2017、129-159

[8]中澤信彦、『バーク読本』(昭和堂、2017 年 8 月)の編集から見えてきたこと、関西大学経済論集、査読無、67：3、2017、161-172

[9]中澤信彦、「バークとマルサス」研究と小林昇経済学史研究、マルサス学会年報、査読有、26、2017、95-117

[10] NAKAZAWA, Nobuhiko、What Attracted Keynes to Malthus's High Price of Provisions? 、Erasmus Journal for Philosophy and Economics、査読有、10:2、2017、24-44

[11] 桑島秀樹、E・バークと一七七〇年代の英国ブリストル陶磁器―クエーカー商人R・チャンピオンとの蜜月関係、a＋a 美学研究、査読無、10、2017、72-83

[12] 中澤信彦、18世紀中葉～19世紀初頭のイングランド社会の結婚パターンとその思想史的意義―ハードウィック結婚法をめぐるバークとマルサスの見解を手がかりにして、経済論叢、査読無、191(1)、2017、1-18

[13] 角田俊男、崇高・信託・公共性―ナショナル・トラストと道東のエコツーリズムとまちおこし、武蔵大学人文学会雑誌、査読無、48(2)、2017、470(43)-436(77)

[14] 苅谷千尋、エドマンド・バークと帝国の言語 ―『第九報告書』(1783年)をめぐって、思想、査読無、1110、2016、29-51

[15] 犬塚元、政治思想史の通史叙述の形成期におけるバーク解釈の変転：学説史において、バークはいつから保守主義の創設者とされたか、法学志林、査読無、114(4)、2017、71-84

[16] 佐藤空、征服と交流の文明社会史―初期バークと近世ブリテンにおける歴史叙述の系譜、経済学史研究、経済学史研究、査読有、58(1)、2016、49-67

[17] 中澤信彦、「バークとマルサス」はどのように論じられてきたのか？―研究史から見えてくるもの、関西大学経済論集、査読無、65：4、2016、35-59

[18] 犬塚元、政治・多元性・批判的知性の擁護：歴史と歴史叙述をめぐるポーコックの思想史・理論研究　1957-2015、思想、査読無、1117、2016、129-159

[19] 佐藤空、バークにおける戦争と文明：野蛮・重商主義帝国・商業社会の危機、経済論叢、査読無、190：2、2016、75-90

[20] 佐藤空、征服と交流の文明社会史：初期バークと近世イングランド史叙述の系譜、経済学史研究、査読有、58、2016、49-68

[21] 真嶋正巳、バーク：第一回大陸会議と『ア

メリカとの和解に関する演説』、社会情報学研究、査読無、20、2015、9-20
[22] SATO, Sora、Edmund Burke's Views of Irish History、History of European Ideas、査読有、41：2、2015、387-403

〔学会発表〕(計 19 件)
[1] 苅谷千尋、国際社会論におけるバーク―"ティーカップ"の中の「論争」？、桜美林大学国際学研究所シンポジウム、2017 年
[2] KUWAJIMA, Hideki、Lafcadio Hearn's 'Celtic Lullaby' and the Resonance of Irish Aesthetics: From his Essay "By the Japanese Sea"、UCD HI Seminar Series(招待講演)(国際学会)、2017 年
[3] 桑島秀樹、生と死のケルト美学―アイルランド映画に読む〈女性的原理〉の可能性、日本ケルト協会(招待講演)、2017 年
[4] 犬塚元、データフィケーションの時代における思想・哲学研究：デジタルデータ、デジタルツール(検索、計量分析)をどう利活用できるか、日本イギリス哲学会 2017 年度研究大会、2018 年
[5] 中澤信彦、政府の「なすべきこと」と「なすべからざること」―ケインズはムーアとバークから何を学んだのか？、経済学史学会第 81 回大会、2017 年
[6] 立川潔、『国富論』における投機と過剰取引－調和的世界に対する確信とその揺らぎ、経済学史学会第 80 回大会、東北大学，仙台市，宮城県
[7] SATO, Sora、Chains of Order, War and Spirit: Rethinking of Edmund Burke's Political Economy、43rd Annual Meetings of the History of Economics Society(国際学会)、2016年06月20日、Duke University, Durham NC, USA
[8] KUWAJIMA, Hideki、Edmund Burke and His Patron Porcelain Manufacturer of the 1770s in Bristol: Richard Champion and the "Burke Service"、20th International Congress of Aesthetics(国際学会)、2016 年 07 月 25 日、Seoul National University, Seoul, South Korea
[9] NAKAZAWA, Nobuhiko、Reviewing the Development of Malthus's Reformist Ideas from 1803 to 1806, With Special Reference to His Criticism of Paine's Rights of Man、48th Annual UK History of Economic Thought Conference(国際学会)、2016年09月02日、Shanghai University of Finance and Economics, Shanghai, China
[10] NAKAZAWA, Nobuhiko、Reviewing Edmund Burke's Concept of 'Revolution': An Overlooked Aspect of the Burke-Paine Controversy、29th Conference of the History of Economic Thought Society of Australia(HETSA)(国際学会)、2016年07月14日、Federation University Australia, Melbourne,Australia
[11] 中澤信彦、「バークとマルサス」研究と小林昇経済学史研究、マルサス学会第 26 回年次大会、2016 年 07 月 03 日、徳島文理大学，徳島県，徳島市
[12] KUWAJIMA, Hideki、Edmund Burke and His Patron Porcelain Manufacturer of the 1770s in Bristol: Richard Champion and the "Burke Service"、20th International Conference of Aesthetics(国際学会)、2016年07月24日～2016年07月29日、Seoul University（韓国）
[13] 立川潔、『国富論』における投機と過剰取引―調和的世界に対する確信とその揺らぎ、経済学史学会大会、2016年05月21日～2016年05月22日、東北大学（宮城）
[14] 角田俊男、国家理性の歴史叙述とバークの国際関係論―1790年代を中心に、日本イギリス哲学会大会、2016年03月29日、学習院大学（東京）
[15] 苅谷千尋、バークのインド統治論 ―政

治経済学と古来の国制論の言語、日本イギリス哲学会大会、2016年03月29日、学習院大学(東京)

[16] 中澤信彦、「バークとマルサス」はどのように論じられてきたのか？―研究史から見えてくるもの、経済学史学会関西部会、2015 年 12 月 12 日、大阪経済大学（大阪）

[17] 桑島秀樹、E・バークの週刊新聞『改革者』に読む一八世紀アイルランド社会変革論―良き〈趣味〉により〈無気力の帝国〉を打ち破れ、公益財団法人・史学会第113回大会(西洋史部会)、2015年11月15日、東京大学　(東京)

[18] 佐藤空、バークにおける戦争と文明―商業社会の形成・財政軍事国家の展開、社会思想史学会大会、2015年11月08日、関西大学（大阪）

[19] NAKAZAWA, Nobuhiko、A Note on the Possible Implications of Keynes's Reading of Malthus's High Price of Provisions、47th Annual UK History of Economic Thought Conference(国際学会)、2015年09月02日、Manchester Metropolitan University（イギリス）

〔図書〕(計４件)

[1] SATO, Sora、Palgrave Macmillan、Edmund Burke as Historian、2017、280

[2] 中澤信彦・桑島秀樹(編)、昭和堂、バーク読本―〈保守主義の父〉再考のために、2017、304

[3] 桑島秀樹、法政大学出版局、生と死のケルト美学―アイルランド映画に読むヨーロッパ文化の古層、2016、266

[4] 佐藤光・中澤信彦(編)、ナカニシヤ出版、保守的自由主義の可能性―知性史からのアプローチ、2015、288

６．研究組織

(1)研究代表者

中澤　信彦(Nakazawa, Nobuhiko)
関西大学・経済学部・教授
研究者番号：40309208

(2)研究分担者

真嶋　正巳(Majima, Masami)
広島文化学園大学・社会情報学部・教授
研究者番号： 00270033

角田　俊男(Tsunoda, Toshio)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号： 20227458

犬塚　元(Inuzuka, Hajime)
法政大学・法学部・教授
研究者番号： 30313224

桑島　秀樹(Kuwajima, Hideki)
広島大学・総合科学研究科・教授
研究者番号： 30379896

苅谷　千尋(Kariya, Chihiro)
立命館大学・公務研究科・助教
研究者番号： 30568994

立川　潔(Tachikawa, Kiyoshi)
成城大学・経済学部・教授
研究者番号： 50197373

土井　美徳(Doi, Yoshinori)
創価大学・法学部・教授
研究者番号： 60306082

佐藤　空(Sato, Sora)
東洋大学・経済学部・講師
研究者番号： 60749307